

## 句構造解釈における文法格の役割

斎藤 衛

### 1. 序

★ 日本語に関するパラメーター：Hale (1980) の階層性パラメーター

- (1) a. 自由語順
- b. 空項の広範な分布
- c. 複合動詞の多用

★ Kuroda (1988) の一致パラメーター

- (2) a. スクランプリング
- b. 多重主格主語文
- c. 義務的な wh 移動の欠如

Kuroda (1988) を発展させることを目的とする。 $\phi$  素性一致の欠如を日本語の基礎的な性質として、文法格の役割と与値メカニズムを捉え直し、項省略現象、多重主語現象、スクランプリング、語彙的複合動詞の多用に説明を与えることを試みる。さらに、句構造形成のメカニズムを検討し、主要部後置型句構造もこれに関係付ける。

★ ミニマリストアプローチの展開

- (3) a. Knowledge of Language ... Last Resort, Full Interpretation
- b. Some Notes on Economy of Derivation and Representation ... Case Theory
- c. A Minimalist Program for Linguistic Theory ... Binding Theory
- d. Bare Phrase Structure ... X'-theory
- e. Categories and Transformation ... Elimination of Last Resort and Minimal Link Condition
- f. Minimalist Inquiries ... Phase Theory
- g. Problems of Projection ... Reconsideration of the Role of  $\phi$ -feature Agreement: Labeling

人間言語特有の現象として、内的併合、 $\phi$  素性一致、文法格がある。 $\phi$  素性一致は、内的併合の必要条件と考えられていたが、Chomsky (2013) は、裸句構造理論を発展させ、 $\phi$  素性一致の存在理由をラベリングに求める。本論では、このコンテキストで、ラベリングの問題を中心に据えて、日本語文法の特徴を考察する。

- (4) a. Saito (2007)、Şener and Takahashi (2010) による項省略現象の分析  
 帰結： $\phi$ 素性一致の欠如
- b. Bošković (2007) の分析を採用し、日本語における文法格の与値メカニズムを検討  
 帰結：多重格現象
- c. 日本語文法格がラベリングにおいて不可欠な役割を果たすことを提案  
 (cf. Chomsky 2013)  
 帰結：DP スクランブリング
- d. 述語の屈折がラベリングにおいて文法格と同様の役割を担うことを示唆  
 (cf. Sells 1995, An 2009)  
 帰結：スクランブリング一般、語彙的複合動詞の特徴
- e. 格与値を再検討し、外池 (2009) の派生メカニズムに関する証拠を提示  
 帰結：主要部後置型句構造
- f. まとめ  
 (cf. Kitahara 2013)

## 2. 日本語における $\phi$ 素性一致の欠如と文法格与値のメカニズム

- ★ 本節では、まず、Saito (2007) および Şener and Takahashi (2010) が提案する項省略現象の分析を概観し、日本語が  $\phi$  素性一致を欠くとする仮説の有効性を見る。次に、この結論をふまえて、文法格の与値を  $\phi$  素性一致とは独立したプロセスとして捉える Bošković (2007) の分析を日本語に適用し、その帰結を探る。

### 2.1. 項省略と $\phi$ 素性

- ★ 空目的語：Kuroda (1965) の pro 分析と Otani and Whitman (1991) による VP 削除分析

- (5) a. 太郎は、いつも自分の博士論文を引用する。  
 b. でも、花子は、全然 [e] 引用しない。  
 i. [e] = 太郎の博士論文 (ストリクト解釈)  
 ii. [e] = 花子の博士論文 (スロッピー解釈)  
 c. でも、花子は、全然それを引用しない。  
 i. [e] = 太郎の博士論文 (ストリクト解釈) のみ
- (6) a. John loves his mother.  
 b. Bill does [e], too.  
 i. [e] = love John's mother (ストリクト解釈)  
 ii. [e] = love Bill's mother (スロッピー解釈)

<Oku (1998), Kim (1999) の項削除仮説>

- (7) a. 花子は、[CP[TP[自分の提案]が採用される] と] 思っている。  
 b. でも、太郎は、[CP[TP[e] 採用される] と] 思っていない。  
 i. [e] = 花子の提案 (ストリクト解釈)  
 ii. [e] = 太郎の提案 (スロッピー解釈)

★ なぜ、英語では項削除が許容されないのか。

- (8) a. John always cites his dissertation.  
 b. \*But Bill doesn't cite [e] at all.

<Oku (1988), 篠原 (2006) の LF コピー分析 — 篠原の議論>

- (9) a. 花子は、[CP 自分の提案が採用されると] 思っているが、太郎は、[CP e] 思っていない。  
 b. 太郎が [CP 花子はその本を買ったと] 言ったし、次郎も [CP e] 言った。
- (10) a. \*本を<sub>2</sub> 太郎は [CP 花子が t<sub>2</sub> 買ったと] 言ったし、雑誌を<sub>6</sub> 次郎は [CP e] 言った。  
 b. \*その本を<sub>3</sub> 太郎は [CP 花子が t<sub>3</sub> 買ったと] 言ったし、その本を<sub>3</sub> 次郎も [CP e] 言った。
- (11) その本を<sub>3</sub> 太郎は [CP 花子が t<sub>3</sub> 買ったと] 言ったし、次郎も [CP e] 言った。

- (12) John knows [CP which boy<sub>7</sub> [IP they chose t<sub>7</sub>]], and Bill knows [CP which girl<sub>11</sub> [IP ~~they chose t<sub>11</sub>~~]]

★ (10) の非文法性、(11) の文法性は、PF 削除分析によっては予測されないが、スクランブルリングの全再構築化をふまえれば、LF コピー分析の帰結として分析することができる。

- (13) a. 太郎が 花子に [CP 次郎が だれに 会ったか] 教えたこと  
 b. \*太郎が だれに [CP 次郎が 花子に 会ったか] 教えたこと

★ Wh 句は、その作用域となる CP に含まれていなければならない。

- (14) a. Who<sub>4</sub> t<sub>4</sub> wonders [CP what<sub>1</sub> [IP John gave t<sub>1</sub> to whom]]  
 b. Who<sub>4</sub> t<sub>4</sub> wonders [CP [which picture of whom<sub>5</sub>]<sub>8</sub> [IP John bought t<sub>8</sub>]]  
 c. ??[Which picture of whom<sub>5</sub>]<sub>8</sub> does John wonder [CP who<sub>4</sub> [IP t<sub>4</sub> bought t<sub>8</sub>]]

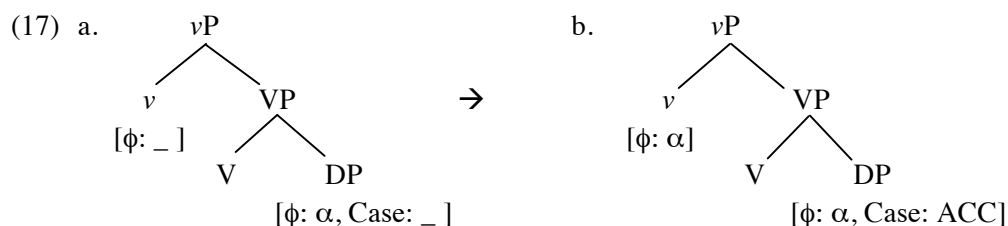
- (15) a. 太郎が [CP 花子が 何を 買ったか] 知りたがっていること  
 b. 何を<sub>9</sub> 太郎が [CP 花子が t<sub>9</sub> 買ったか] 知りたがっていること (Saito 1989)

- (16) a. [CP 花子が その本を 買ったと] (先行詞の LF)

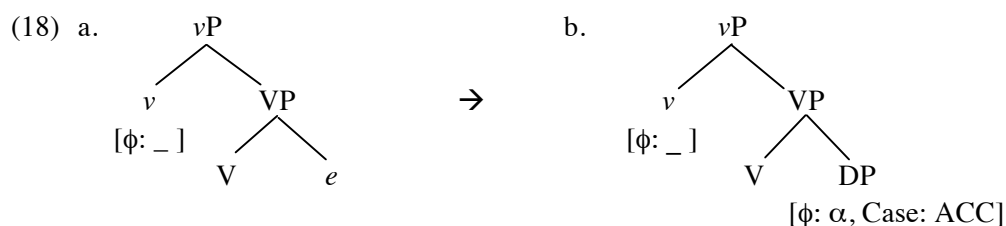


- b. (その本を) 太郎は [CP.....] 言った

<Chomsky (2000) に基づく Saito (2007) の提案 ... 活性条件>



<LFコピーによって形成される構造>



★  $v$  の  $\phi$  素性が与値されず、派生が破綻する。一方、日本語では、 $v$  が  $\phi$  素性を有しないため、問題は生じない。故に、項省略は、 $\phi$  素性一致がない場合にのみ許容される。

## 2.2. 日本語における文法格の与値

<日本語が  $\phi$  素性一致を欠くとすれば、文法格はどのように与値されるのか。>

★ 日本語では、DP のみならず、PP が文法格を伴うコンテキストが広範に観察される。  
(PP主語、名詞句内のPP)

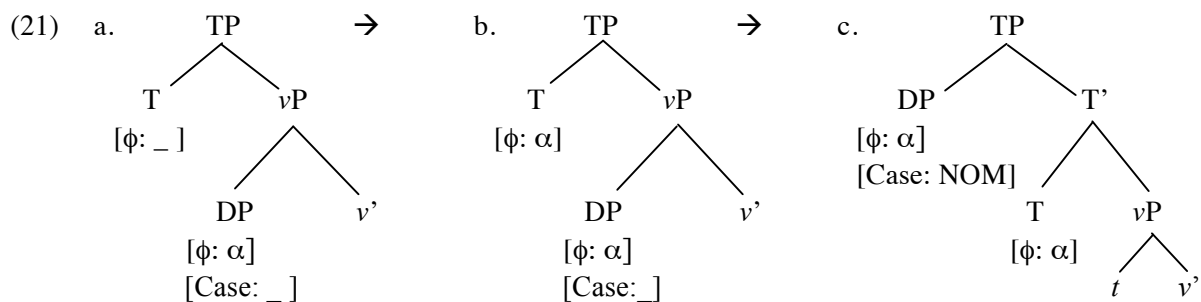
- (19) a. ここからが、富士山に登りやすい。  
b. 5時までが、運賃が安い。

- (20) a. [太郎の [友達との [ヨーロッパへの旅行]]]  
b. [花子の [無一文での [東京からの出発]]]

★ DP と異なり、PP は少なくとも意味解釈が与えられうる  $\phi$  素性を有しない。従って、PP に付随する主格や属格が  $\phi$  素性一致を通して与値されるとは考えにくい。

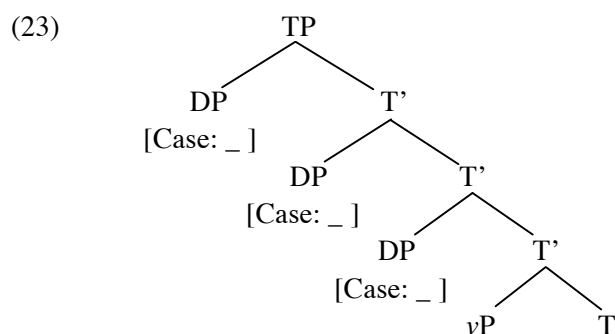
★ 文法格の与値と  $\phi$  素性一致を切り離す提案としては、Bošković (2007) のものがある。

<Bošković (2007) の文法格与値メカニズム>



★ この分析は、日本語文法格の与値を可能にするだけでなく、多重格現象を正しく予測する。

(22) [<sub>TP</sub> 文明国が [<sub>TP</sub> 男性が [<sub>TP</sub> 平均寿命が短い]]] (Kuno 1973)



### 3. ラベリングを可能にする文法格の役割

Chomsky (2000, 2008) は、活性条件により、文法格を  $\phi$  素性一致を可能にするものと位置付ける。しかし、日本語に  $\phi$  素性一致がないのであれば、文法格の意義は他に求められなければならない。本節では、Chomsky (2013) における構成素のラベリングに関する議論を概観し、その上で、日本語の文法格がラベリングにおいて重要な役割を担うとの提案を行う。さらに、Sells (1995)、An (2009) の洞察に基づき、述語の屈折にも同様の機能があることを主張し、日本語の句構造形成におけるラベリングについてより一般的に議論する。

<併合に基づく Chomsky (1994) の裸句構造理論>

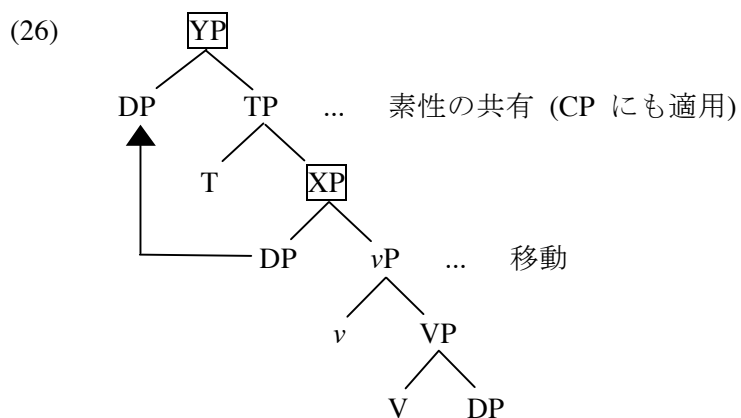
(24)  $\gamma = \{\alpha, \beta\}$

★ ラベリングの問題 (Chomsky 2013)

(25) a.  $\gamma = \{H, \beta P\} \dots H$

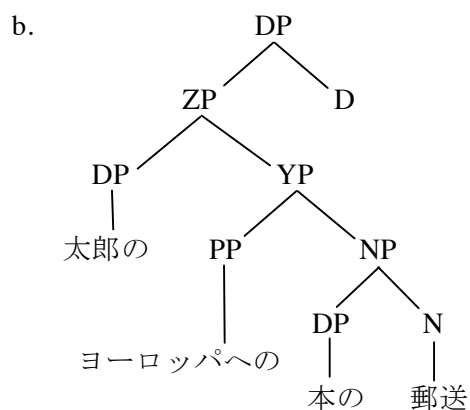
b.  $\gamma = \{\alpha P, \beta P\} \dots ?$

c.  $\gamma = \{H, H\} \dots ?$



★ 日本語が  $\phi$  素性一致を欠くとすれば、YP のラベリングが問題となる。以下の例も同様。

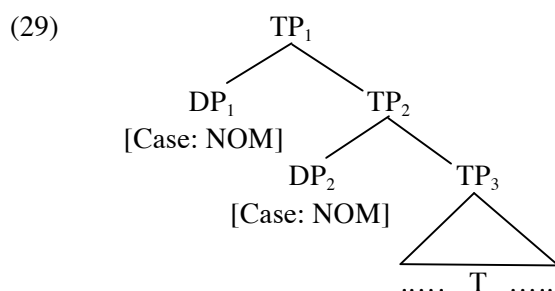
(27) a. [太郎の[ヨーロッパへの[本の郵送]]]



解決案として、日本語の文法格がラベリングに直接寄与する可能性を追究する。明確な一般化として、格を伴う句は常に最大投射であり、さらに投射することはないということがある。そこで、文法格の機能として、ラベリングにおいて句を不可視的にすることが考えられる。

(28)  $\gamma = \{\alpha P [\text{Case}], \beta P\}$

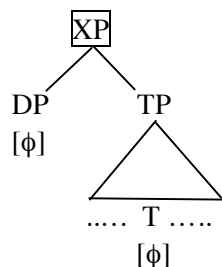
★ この仮説により、二つの帰結が導かれる。第一に、前節で提示した多重主格主語の分析が完結したものとなる。特に、英語ではなぜ多重主格主語が許容されないのかを、ラベリングの問題に還元することができる。



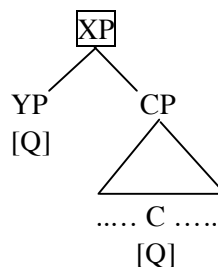
★ 第二に、日本語において、DP のスクランブリングが可能であることが予測される。日本語のスクランブリングについては、様々な分析が提案されているが、明確な性質の一つとして、演算子移動でも A 移動でもないということがある。

- (30) a. みんなが [CP 花子がどの本を選んだか] 知りたがっていること  
 b. どの本を<sub>i</sub> みんなが [CP 花子が  $t_i$  選んだか] 知りたがっていること

(31) a. A 移動

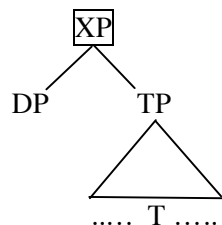


b. wh 移動

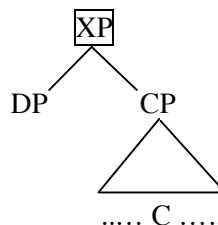


(32) スクランブリング

a.



b.



★ 同時に、英語では DP スクランブリングが許容されないことも予測される。しかし、日本語において、スクランブリングの対象となるのは、DP だけではない。

- (33) a. ロンドンから<sub>i</sub> 花子が  $t_i$  戻った  
 b. 静かに<sub>i</sub> 太郎が  $t_i$  帰った

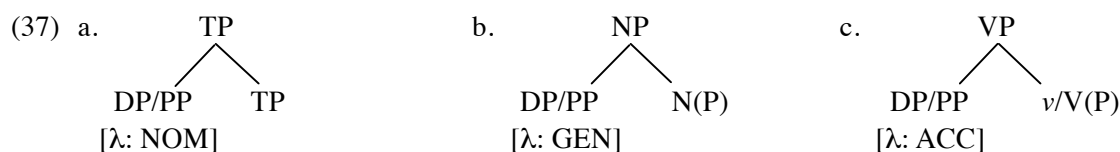
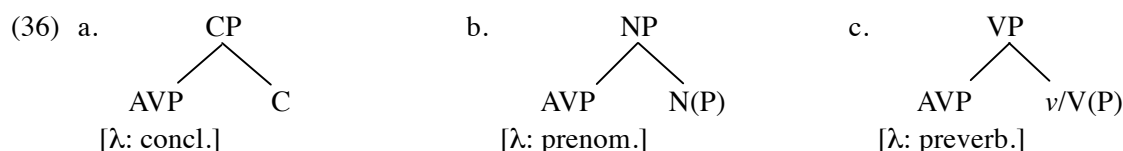
★ PP は、(20) に見たように、名詞の投射内では属格を伴う。そこで、(33a) のように PP が文内に生起する場合にも、音声的に空の格を伴うものと仮定することができる。副詞句については、どのように考えることができるだろうか。

★ 日韓語の文法格と述語屈折を類似するものとして捉える Sells (1995)、An (2009) のアプローチを採用し、日本語におけるラベリングについてより一般的に考察することにする。

- (34) a. この部屋は、[とても静かだ] (終止形)  
 b. [とても静かな] ホテルの部屋 (連体形)  
 c. 太郎は [とても静かに] 部屋を出た (連用形)

★ 格を伴う DP や PP と同様に、屈折述語を主要部とする句も、屈折の形を決定する要素と併合する際に、決して投射しない。従って、ラベリングにおいて句を不可視的にする「反ラベリング素性」 $\lambda$  が存在し、 $\lambda$  は DP や PP においては文法格、述部においては屈折として与値されるとすることができる。

- (35) a.  $\gamma = \{\alpha P [\lambda], \beta P [\lambda]\} \dots X$   
 b.  $\gamma = \{\alpha P [\lambda], \beta P\} \dots \beta$  のラベル  
 c.  $\gamma = \{\alpha P, \beta P\} \dots X$  または素性共有によるラベリング



(38) 静かに<sub>i</sub> 太郎が<sub>t<sub>i</sub></sub> 帰った

## 4. 複合動詞形成と選択制限

### 4.1. 語彙的複合動詞に見られる他動性調和現象

★ 影山 (1993) による語彙的複合動詞の記述を概観し、以下の構造を持つことを示唆する。

(39)  $\gamma = \{H [\lambda], H\}$

(40) 語彙的複合動詞  $V_1+V_2$  において、 $V_1$  と  $V_2$  は外項の有無に齟齬があってはならない。  
 (他動性調和の原則)

- (41) a. 花子が太郎を押し倒した  
 b. \*太郎が鯨を浮かび見た

- (42) a. 他動詞+他動詞：引き抜く、握りつぶす、叩き落とす、刈り取る、受け止める  
 b. 非能格+非能格：走り寄る、飛び降りる、駆け上る、歩き回る、群れ飛ぶ  
 c. 非対格+非対格：滑り落ちる、浮かび上がる、生まれ変わる、降り注ぐ



- d. 他動詞＋非能格：持ち歩く、探しまわる、待ち構える
- e. 非能格＋他動詞：泣き腫らす、乗り換える、飲み潰す、踊り明かす

- (43) a. 非対格＋他動詞：\*浮かび見る、\*落ち隠す
- b. 他動詞＋非対格：\*押し倒れる、\*飲み酔う
- c. 非能格＋非対格：\*遊び落ちる、\*走り転ぶ
- d. 非対格＋非能格：\*落ち降りる、\*流れ泳ぐ

★ (40) に示した一般化は、普遍的に観察されるものではない。従って、日本語の語彙的複合動詞の性質から導かれるものと考えられる。

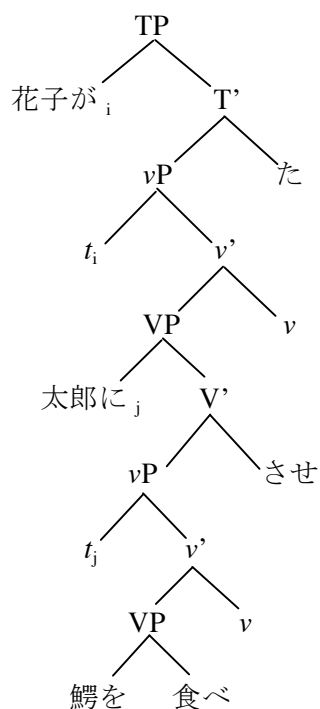
- (44) a. Ta he-zui               (jiu) le               (Huang 1992)  
he drink-get.drunk wine Asp.  
'He drank (wine) and got drunk'
- b. Ta qi-lei-le           lianpi ma  
he ride-tired-Asp. two horse  
'He rode two horses and got them tired'

★ 語彙的複合動詞  $V_1+V_2$  においては、 $V_1$  と  $V_2$  がそれぞれ項構造を有するが、複合動詞が単一の VP を投射する。

<統語的複合動詞>

- (45) a. 花子が太郎に鰐を食べさせた
- b. 太郎が鰐を食べ始めた
- (46) a. 花子が太郎にそうさせた
- b. 太郎がそうし始めた
- (47) a. 花子が太郎を押し倒した
- b. \*花子が (太郎を) そうし倒した
- (48) a. 太郎が滑り落ちた
- b. \*太郎がそうし落ちた

(49) (Murasugi and Hashimoto 2004)

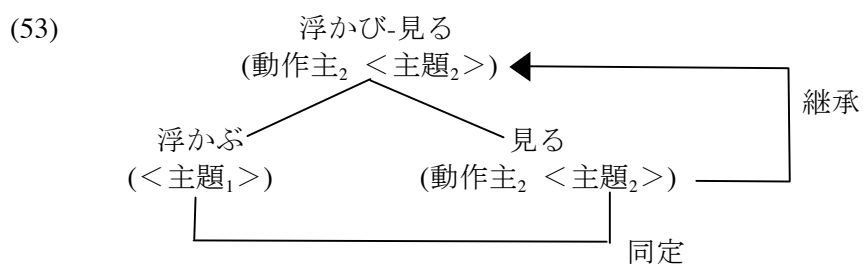
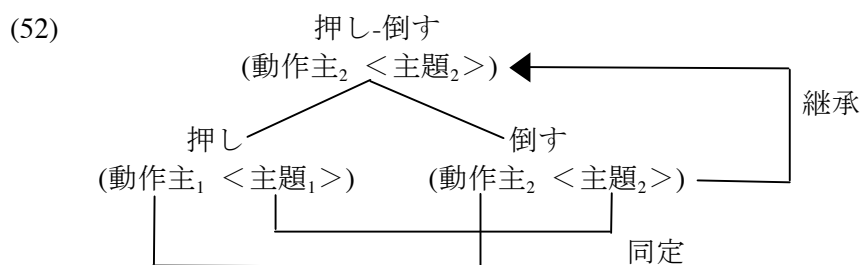


&lt; 語彙概念構造の操作を伴う複合動詞 &gt;

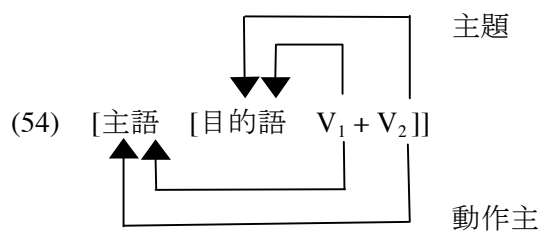
- (50) a. 花子が太郎を部屋に追い込んだ  
 b. 太郎が川に飛び込んだ  
 c. 汚染水が海に流れ込んだ

★ 影山 (1993) による語彙的複合動詞の項同定分析

(51) 花子が太郎を押し倒した



<併合による分析と他動性調和現象の説明>



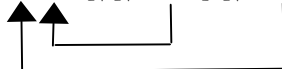
(55) a. 油が壁に染み付いた (cf. 影山 1993)

b. 蔦が棒に絡み付いた

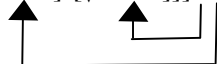
(56) a. \*蔦が棒に染み付いた

b. \*油が壁に絡み付いた

(57) a. [<sub>VP</sub> 太郎 [<sub>V</sub> [<sub>V</sub> 押し]-[<sub>V</sub> 倒す]]]



b. [<sub>V</sub> [<sub>VP</sub> 太郎 [<sub>V</sub> [<sub>V</sub> 押し]-[<sub>V</sub> 倒す]]] v\*]



★ (58) に再掲する他動性調和の一般化は、v/v\* の選択制限の帰結として導かれる。

(58) 語彙的複合動詞 V<sub>1</sub>+V<sub>2</sub>において、V<sub>1</sub>と V<sub>2</sub>は外項の有無に齟齬があってはならない。

★ なぜ、(59) に示すように、V と V を併合することにより、複合動詞を形成することが可能なのか。— 形態的制約とラベリング

(59) a.  $\gamma_1 = \{V_1, V_2\}$

b.  $\gamma_2 = \{DP, \{V_1, V_2\}\}$

(60) a. 押し倒す = os-i + taos + ru

b. 滑り落ちる = suber-i + oti + ru

(61) 飛び込む = tob-i + kom ... [V-i V] は、形態的に単一の動詞と解釈しうる。

★ -i は、 $\lambda$ 素性 (preverbal) の具現化と考えられる。

(62) a. 花子は、いつも、[<sub>VP</sub> テーブルを押し]、花瓶を倒す

b. 太郎は、[<sub>VP</sub> 滑り]、穴に落ちた

- (63) a. 花子が太郎を押し倒した  
 b. 花子が、 $[_{VP}$  太郎 $_i$ を押し]、 $pro_i$  倒した

(64)  $\gamma = \{V_1[\lambda], V_2\}$  ... 語彙的複合動詞の構造

#### 4.2. 主要部編入と選択制限

(65) 中国語

- a. Ta he-zui (jiu) le (= (44))  
 he drink-get.drunk wine Asp.  
 ‘He drank (wine) and got drunk’
- b. Ta qi-lei-le lianpi ma  
 he ride-tired-Asp. two horse  
 ‘He rode two horses and got them tired’

(66) エド語

- Òzó suá Úyì dé (Baker and Stewart 1999)  
 Ozo push Uyi fall  
 ‘Ozo pushed Uyi, which made him fall.’

(67) 日本語軽動詞構文

花子が太郎から  $[_{NP}$  宝石の略奪] をした (Grimshaw and Mester 1988)


(68) 日本語統語的複合動詞

- a. 花子が太郎に鰐を食べさせた (= (45a))  
 b. 子供たちが気球を (空高く) 舞い上がらせた

<日本語軽動詞構文>

- (69) a. 花子が 太郎に  $[_{NP}$  土地の譲渡] をした  
 b. 花子が 太郎から  $[_{NP}$  宝石の略奪] をした

★ Saito and Hoshi (2000) の非顕在的編入分析

(70) 花子が 太郎に  $[_{NP}$  土地の譲渡] をした  


(71) a. \*3 cc の水が 皿から 蒸発をした

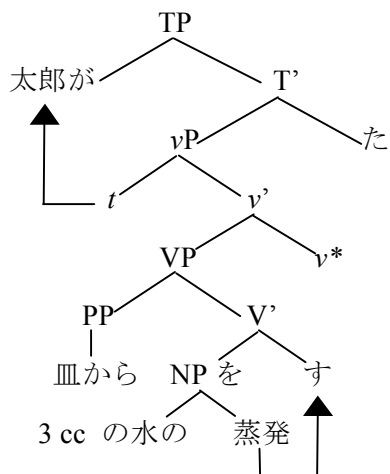
b. \*岩が 崖から 落下を した

(Grimshaw and Mester 1988, Miyagawa 1989, Tsujimura 1990)

(72) a. \*太郎が 皿から [NP 3 cc の水の蒸発] を した

b. \*花子が 崖から [NP 岩の落下] を した

(73)



★ (72) は他動性調和現象であり、同様に分析できる。

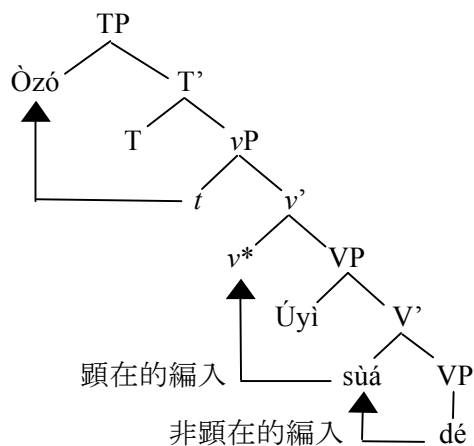
<エド語結果連鎖動詞構文>

★ Saito (2001) の非頭在的編入分析

(74) Òzò sùá Úyì dé (= (66))

Ozo push Uyi fall

‘Ozo pushed Uyi, causing him to fall.’



★ (74) の文法性から、以下の結論を導くことができる。(Saito 2014)

- (75) a. 主要部編入は、非循環的に適用しうる。  
 b. 選択制限は、併合に係る制約である。  
 (cf. \*John lifted the dream)

★ (75) により、中国語複合動詞、日本語統語的複合動詞も問題とはならない。

<エド結果連鎖動詞構文と中国語複合動詞構文の相違>

- (76) a. \*Òzó ré kp`Ol`O

Ozo ate be.big  
 ‘Ozo ate himself fat.’

- b. \*Òzó dá (ày`On) mu`Emu`E

Ozo drink palm wine be.sluggish  
 ‘Ozo drank palmwine and became sluggish.’

- (77) a. Ta chi-bao (fan) le (Huang 2006 参照)

he eat-full rice Asp.  
 ‘He ate (rice) and became full.’

- b. Ta he-zui (jiu) le

he drink-drunk wine Asp.  
 ‘He drank (wine) and became drunk.’

- (78) a. [<sub>VP</sub> Ta [<sub>v'</sub> v [<sub>VP</sub> fan [<sub>v'</sub> [v chi] [<sub>VP</sub> [v bao]] ] ] ] ] (Merge to yield the base vP structure)

- b. [<sub>VP</sub> Ta [<sub>v'</sub> v [<sub>VP</sub> fan [<sub>v'</sub> [v [v chi] [v bao]] [<sub>VP</sub> [v bao]] ] ] ] ]

- c. [<sub>VP</sub> Ta [<sub>v'</sub> [v v [v [v chi] [v bao]]] [<sub>VP</sub> fan [<sub>v'</sub> [v [v chi] [v bao]] [<sub>VP</sub> [v bao]] ] ] ] ]

- (79) a. 顕在的移動 :  $\alpha$  ...  $\epsilon$  (Bobaljik 1995)



- b. 非顕在的移動 :  $\epsilon$  ...  $\alpha$



- (80) a. [ ... [V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub>] ... V<sub>2</sub> ... ]

- b. [ ... v + [V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub>] ... [V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub>] ... V<sub>2</sub> ... ]

- b. [ ... v + [V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub>] ... [V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub>] ... ~~V<sub>2</sub>~~ ... ] (顕在的移動)

- c. [ ... v + [V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub>] ... [~~V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub>~~] ... ~~V<sub>2</sub>~~ ... ] (顕在的移動)

- (81) a. [... [V<sub>1</sub>+V<sub>2</sub>] ... V<sub>2</sub> ... ]  
 b. [... v+ [V<sub>1</sub>+V<sub>2</sub>] ... [V<sub>1</sub>+V<sub>2</sub>] ... V<sub>2</sub> ... ]  
 b. [... v+ [V<sub>1</sub>+V<sub>2</sub>] ... [V<sub>1</sub>+V<sub>2</sub>] ... V<sub>2</sub> ... ] (非顕在的移動)  
 c. [... v+ [V<sub>1</sub>+V<sub>2</sub>] ... [V<sub>1</sub>+V<sub>2</sub>] ... V<sub>2</sub> ... ] (顕在的移動)

★ 音声素性の削除は、P-A 部門への Transfer の一環として行われるという仮説の下で、(76) の非文法性は説明される。

## 5. 日本語の主要部後置型語順に関する考察

最初に Saito (2012) で提案した日本語句構造の形成メカニズムとそれに基づく主要部後置型語順の分析を紹介する。その上で、 $\phi$  素性一致の欠如がこのメカニズムを可能にすることを示す。

<Koizumi (1998) による主格目的語の分析について>

- (82) a. 花子がテルグ語がわかる (こと)  
 b. [<sub>TP</sub> 花子が [<sub>T</sub> テルグ語が [<sub>T</sub> [<sub>VP</sub> t [<sub>V'</sub> [<sub>VP</sub> t わかる (wakar) ] v]] T (-ru)]]]
- 

★ 主格目的語は目的語の位置に留まる。(Yatsushiro 1999)

- (83) a. 学生が3人この鍵でドアを開けた (Miyagawa 1989)  
 b. ??学生がこの鍵で3人ドアを開けた

(84) ドアがこの鍵で3つ開いた

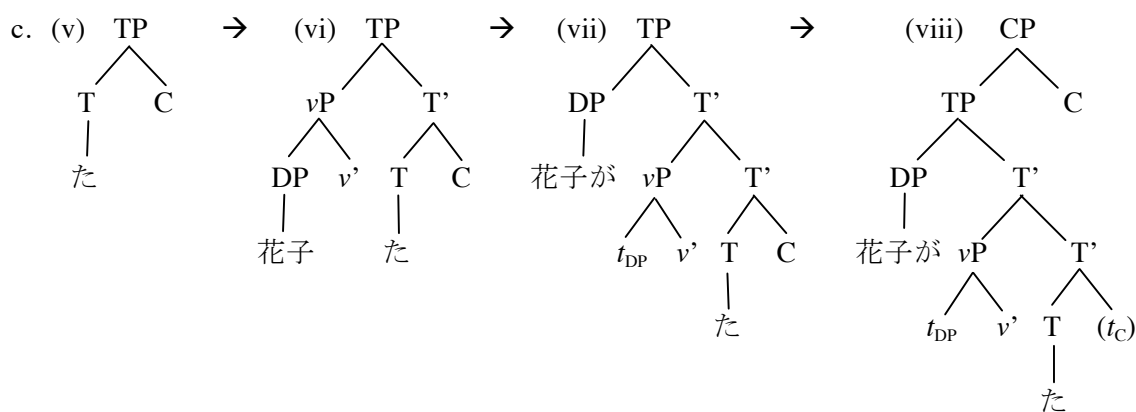
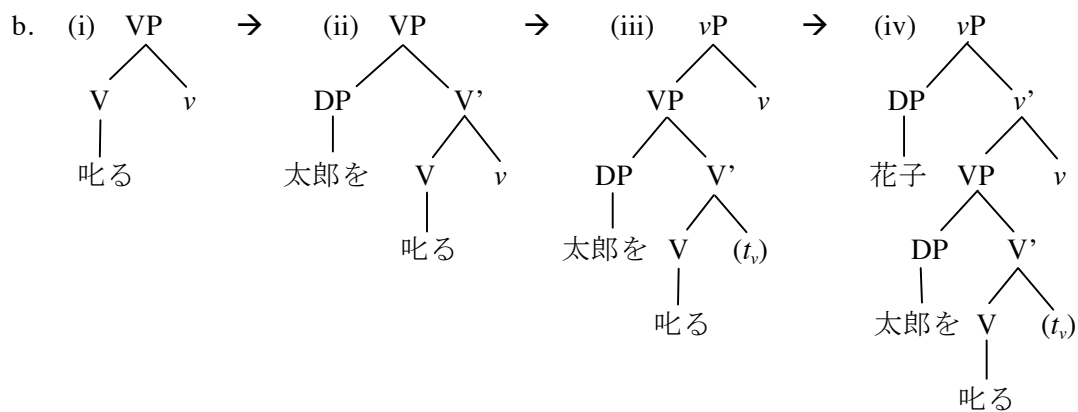
- (85) [<sub>TP</sub> ドアが [<sub>VP</sub> [<sub>VP</sub> この鍵で [<sub>VP</sub> t 3つ 開い (ak) ] ] v] T (ta)]
- 

- (86) a. 学生が3人テルグ語がわかる (こと)  
 b. ??学生がテルグ語が3人わかる (こと)

- (87) [<sub>TP</sub> 学生が [<sub>T</sub> テルグ語が [<sub>T</sub> [<sub>VP</sub> t 3人 [<sub>V'</sub> [<sub>VP</sub> t わかる (wakar) ] v]]] T (-ru)]]]
- 

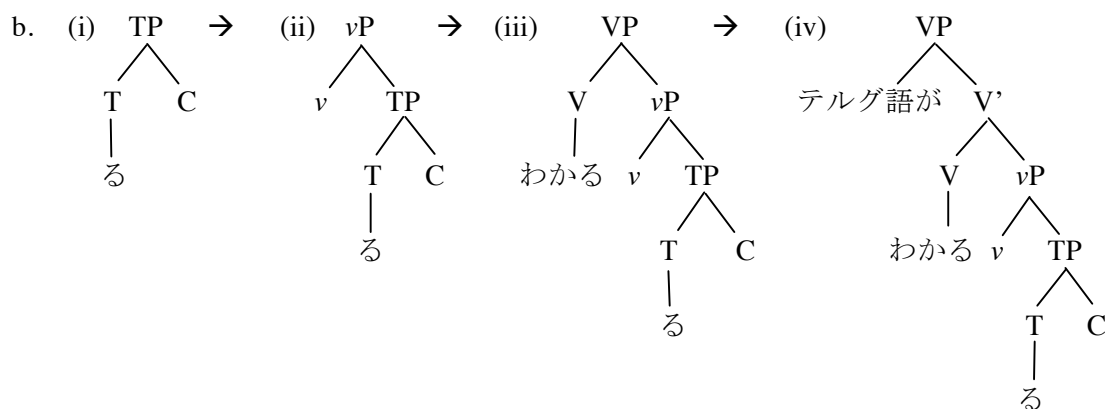
★ 主格目的語は、目的語の位置のあって、Tを探索し、主格を与値される。このパラドックスは、外池 (2009) の派生メカニズムにより解決される。(cf. Kitagawa 1986, Shimada 2007)

(88) a. 花子が太郎を叱った

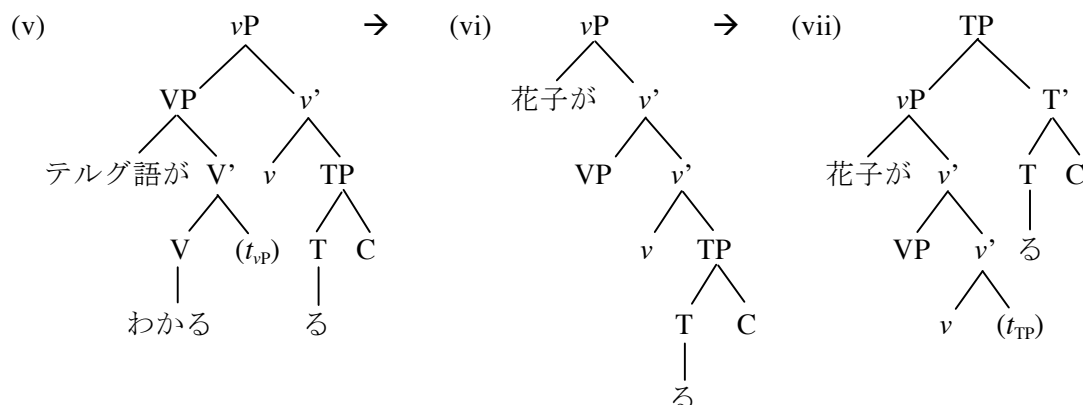


★ Saito (2012) は、(63) に例示した句構造派生のメカニズムの帰結を二つ指摘する。第一に、主格目的語の問題の解決が可能になることがある。

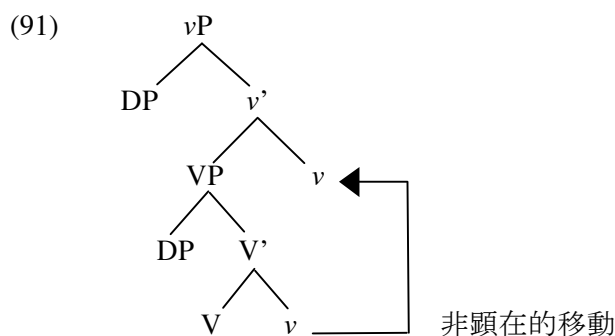
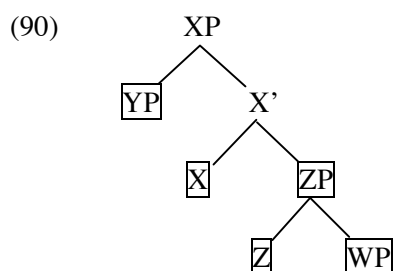
(89) a. 花子がテルグ語がわかる (こと)



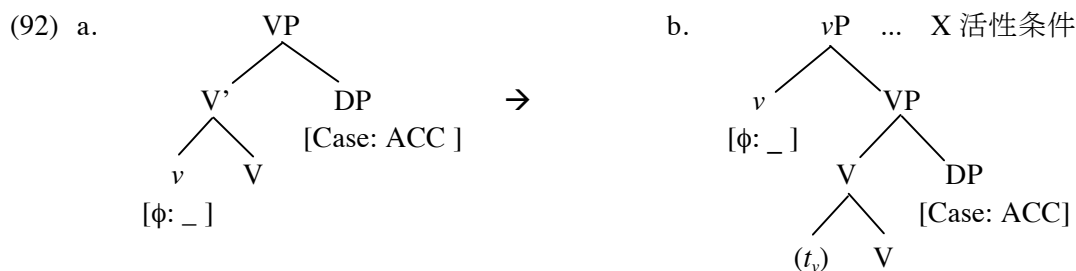




★ もう一つの帰結は、Kayne (1994) の線状的先行関係の構造対応公理 (Linear Correspondence Axiom, LCA) により、日本語の主要部後置型語順を導く可能性が開かれることである。



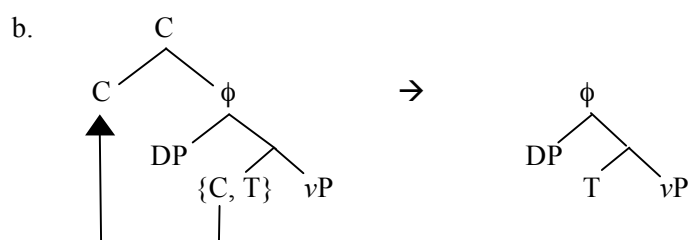
Saito (2012) では、外池 (2009) が提案する句構造形成のメカニズムを普遍的なものとして、主要部前置型／後置型の語順の相違を、主要部の内的併合が顕在的であるか非顕在的であるかの相違に基づいて分析することを示唆した。一方、Kitahara (2013) は、日本語については、外池 (2009) の派生、英語については、 $v$  が  $\{V, DP\}$  と併合する標準的な派生が適用されるとしている。本論の第2節で提示した  $\phi$  素性と格素性と値のメカニズムにより、Kitahara の提案を支持する証拠を得ることができる。



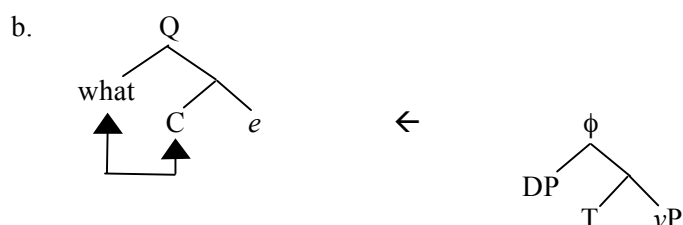
★ 日本語では、 $\phi$  素性一致の欠如が主要部の内的併合を伴う派生を可能とし、また、主要部の内的併合が非頭在的であるが故に、主要部後置型の語順となるということが出来る。主要部後置型の語順は、Kayne (1994) が指摘するように、主要部を非対称的に c 統御する位置への補部の移動によっても得られる。従って、すべての主要部後置型言語が、外池 (2009) が提案する派生のメカニズムを採用するわけではない。しかし、日本語においては、 $\phi$  素性の欠如と主要部後置型の語順が密接に関連していると思われる。

<削除に関する Saito and Murasugi 1990, Lobeck 1990 の一般化について>

(93) a. John thinks that Mary was in London



(94) a. John bought something, but I don't know what



< $v$ -V, C-T の併合>

★  $\{v, V\}$ ,  $\{C, T\}$  として併合を適用するか、それぞれの主要部を別々に併合するか、いずれも可能。英語の場合、自動的に選択が決まる。日本語を考慮すると、前者が無標の選択か。

## 6. 結論

本論では、日本語の基本的性質として、 $\phi$  素性一致の欠如を仮定し、その帰結を追究した。第2節では、まず、項省略現象が、 $\phi$  素性一致の欠如の直接的な帰結として導かれるとする Saito (2007) の議論を概観した。その上で、 $\phi$  素性一致の欠如と矛盾しない文法格与値メカニズムを提供するものとして、Bošković (2007) の提案を採用し、日本語文法格の分析を提示した。この分析の顕著な帰結としては、主格、属格に見られる多重文法格現象の説明がある。第3節では、日本語文法格の機能が、ラベリングを可能にすることにあることを提案した。

また、文法格と述語の屈折を類似するものとして分析する Sells (1995)、An (2009) を発展させて、両者を、ラベリングを補助する同一の素性の具現化であるとする分析を提示した。この分析により、日本語において、非演算子移動、非 NP 移動であるスクランブリングが許容されることに説明を与えた。さらに、第4節では、影山 (1993) において詳細に検討されている語彙的複合動詞の特異な性質も、この分析の帰結として導かれることを示した。第5節では、主格目的語の文法格与値をとりあげて、併合による句構造形成のあり方を検討し、日本語の主要部後置型語順が、 $\phi$  素性一致の欠如と密接に関連していることを示唆した。

#### 参考文献

- An, Duk-Ho (2009) "A Note on Genitive Drop in Korean." *Nanzan Linguistics* 5: 1-16.
- Baker, Mark and Osamuyimen T. Stewart (1999) "On Double-Headedness and the Anatomy of the Clause." Unpublished manuscript, Rutgers University.
- Bobaljik, Jonathan (1995) *Morphosyntax: The Syntax of Verbal Inflection*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Bošković, Željko (2007) "On the Locality and Motivation of Move and Agree: An Even More Minimalist Theory." *Linguistic Inquiry* 38: 589-644.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris Publications.
- Chomsky, Noam (1994) "Bare Phrase Structure." In Gert Webelhuth (ed.), *Government and Binding Theory and the Minimalist Program*, 383-439. Oxford: Blackwell.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework." In Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.), *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases." In Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta (eds.), *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essay in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, 133-166. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection." *Lingua* 130: 33-49.
- Fukui, Naoki (1986) *A Theory of Category Projection and its Applications*, Ph.D. dissertation, MIT.
- Grimshaw, Jane and Armin Mester (1988) "Light Verbs and  $\theta$ -Marking." *Linguistic Inquiry* 19: 205-232.
- Hale, Ken (1980) "Remarks on Japanese Phrase Structure: Comments on the Papers on Japanese Syntax." *MIT Working Papers in Linguistics* 2: 185-203.
- Hiraiwa, Ken (2001) "Multiple Agree and the Defect Intervention Constraint." *MIT Working Papers in Linguistics* 40: 67-80.
- Huang, C.-T. James (1992) "Complex Predicates in Control." In Richard K. Larson, et al. (eds.), *Control and Grammar*, 109-147. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Huang, C.-T. James (2006) "Resultatives and Unaccusatives: A Parametric View." *Bulletin of the Chinese Linguistic Society of Japan* 253: 1-43.

- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 東京：ひつじ書房.
- Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kim, Soowon (1999) “Sloppy/Strict Identity, Empty Objects, and NP Ellipsis.” *Journal of East Asian Linguistics* 8: 255-284.
- Kitagawa, Yoshihisa (1986) *Subjects in Japanese and English*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Kitahara, Hisatsugu (2013) “Simplest Merge and Language Variation.” Unpublished manuscript, Keio University.
- Koizumi, Masatoshi (1998) “Remarks on Nominative Objects.” *Journal of Japanese Linguistics* 16: 39-66.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kuroda S.-Y. (1965a) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Kuroda, S.-Y. (1965b) “Causative Forms in Japanese.” *Foundations of Language* 1: 30-50.
- Kuroda, S.-Y. (1988) “Whether We Agree or Not.” *Linguisticae Investigationes* 12: 1-47.
- Lobeck, Anne (1990) “Functional Heads as Proper Governors.” *NELS* 20: 348-362.
- Miyagawa, Shigeru (1989a) *Structure and Case Marking in Japanese*. San Diego: Academic Press.
- Miyagawa, Shigeru (1989b) “Light Verbs and the Ergative Hypothesis.” *Linguistic Inquiry* 20: 659-668.
- Murasugi, Keiko and Tomoko Hashimoto (2004) “Three Pieces of Acquisition Evidence for the v-VP Frame.” *Nanzan Linguistics* 1: 1-19.
- Oku, Satoshi (1988) *A Theory of Selection and Reconstruction in the Minimalist Program*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.
- Otani, Kazuyo and John Whitman (1991) “V-raising and VP-ellipsis.” *Linguistic Inquiry* 22: 345-358.
- Pesetsky, David (1989) “Language-Particular Processes and the Earliness Principle,” Unpublished manuscript, MIT.
- Saito, Mamoru (1982) “Case Marking in Japanese: A Preliminary Study.” Unpublished manuscript, MIT.
- Saito, Mamoru (1989) “Scrambling as Semantically Vacuous A'-movement.” In Mark R. Baltin and Anthony S. Kroch (eds.), *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, 182-200. Chicago: University of Chicago Press.
- Saito, Mamoru (2001) “Movement and  $\theta$ -roles: A Case Study with Resultatives.” In Yukio Otsu (ed.), *The Proceedings of the Second Tokyo Conference on Psycholinguistics*, 35-60. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Saito, Mamoru (2007) “Notes on East Asian Argument Ellipsis.” *Language Research* 43: 203-227.
- Saito, Mamoru (2012) “Case Checking/Valuation in Japanese: Move, Agree or Merge?” *Nanzan Linguistics* 8: 109-127.
- 齋藤 衛 (2014) 「複合動詞の形成と選択制限—他動性調和の手掛かりとして」, 岸本秀樹, 由

- 本陽子(編)『複雑述語研究の現在』東京：ひつじ書房, 207-233.
- Saito, Mamoru and Hiroto Hoshi (2000) “The Japanese Light Verb Construction and the Minimalist Program.” In Roger Martin, et al., eds., *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, 261-295. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Saito, Mamoru, T.-H. Jonah Lin and Keiko Murasugi (2008) “N'-Ellipsis and the Structure of Noun Phrases in Chinese and Japanese.” *Journal of East Asian Linguistics* 17: 247-271.
- Saito, Mamoru and Keiko Murasugi (1990) “N'-deletion in Japanese: A Preliminary Study.” *Japanese/Korean Linguistics* 1: 285-301.
- Sells, Peter (1995) “Korean and Japanese Morphology from a Lexical Perspective.” *Linguistic Inquiry* 26: 277-325.
- Şener, Serkan and Daiko Takahashi (2010) “Argument Ellipsis in Japanese and Turkish.” *MIT Working Papers in Linguistics* 61: 325-339.
- Shimada, Junri (2007) “Head Movement, Binding Theory, and Phrase Structure.” Unpublished manuscript, MIT.
- 篠原道枝 (2006)『日本語の項削除文の LF コピー分析 — 痕跡の要素を含む観点から』修士論文, 南山大学大学院人間文化研究科言語科学専攻.
- Takahashi, Masahiko (2010) “Case, Phases, and Nominative/Accusative Conversion in Japanese.” *Journal of East Asian Linguistics* 19: 319-355.
- 外池滋生 (2009)「ミニマリスト・プログラム」, 中島平三 (編)『言語学の領域 (I)』東京：朝倉書店, 135-168.
- Tsujimura, Natsuko (1990) “Ergativity of Nouns and Case Assignment.” *Linguistic Inquiry* 21: 277-287.
- Ura, Hiroyuki (1999) “Checking Theory and Dative Subject Constructions in Japanese and Korean.” *Journal of East Asian Linguistics* 8: 223-254.
- Webelhuth, Gert (1989) *Syntactic Saturation Phenomena and the Modern Germanic Languages*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Williams, Edwin (1977) “Discourse and logical form.” *Linguistic Inquiry* 8: 101-139.
- Yang, Dong-Whee (1983) “The Extended Binding Theory of Anaphors.” *Language Research* 19: 169-192.
- Yatsushiro, Kazuko (1999) *Case Licensing and VP Structure*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.